



2022年7月15日発行（季刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2022年7月
第124号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0063 横浜市中区花咲町1-46-1-1105 Tel 090-9003-7279
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久

マゼンタの夾竹桃が 咲いています



目 次

『常用字解』の音訳版完成（岡田健嗣）	1
点字から識字までの距離（117）（山内 薫）	10
わたくしごと（木村多恵子）	15
漢文のページ	19
ご報告とご案内	21
編集後記（木下和久）	23

『常用字解』の音訳版が

完成しました

岡田 健嗣

このほど、二〇二二（令和四）年六月、計らずも十一年に及ぶ年月がかかりましたが、『常用字解』（白川静著・平凡社）の音訳が完成しました。間もなく全国の見覚障害者・音訳者・視覚障害者へのサービスをしておられる施設の皆様のお手元に、お届けできるものと存じます。

十一年という年月を費やしましたには、それ相当の理由がありました。その多くは、このプロジェクトの開始以前には、残念ながら予想ができないものでした。いきおい、いわゆる泥縄を余儀なくされたために、遠回りの道を選んだりともなりました。

その理由とは、一言に申せばこれまでの音訳の手法では、本書には到底太刀打ちが叶わなかったということになります。また敢えて言うならば、そこが本書の

音訳に、これまでどこも手を付けようとしなかった理由でもあります。しかしながら私は当初から、それは遣り方次第で克服できるものと考えておりました。

この『常用字解』という書物は、白川先生の著作の内、三部作と呼ばれている『字統』『字訓』そして『字通』の内容を平易にして、先生のおっしゃるところによれば、「中学生にも分かる」書物として、見出し字を「常用漢字」に絞って編纂されたものです。常用漢字一文字一文字の字形を取り上げて、その字形の表す中国文化について解説が施されています。体裁は漢字という文字についての解説ですので、その意味では「漢和辞典」とも言えますが、これまでの「漢和辞典」とは大きく異なったところがあります。それは、従来の「漢和辞典」は、文字の読みや意味、そして用例に主眼が置かれていましたが、この『常用字解』では、出来る限り時間を遡って、字形を解明して、文字の分析を通して当時の社会の分析をも試みておられることです。従ってこの書物は、「漢和辞典」と言うよりは、「社会批評」の書と言えるものと私は考えます。

「漢字はもともとその時代の社会的儀礼・加入儀礼の実際に即して生まれたものであり、そのような生活の場から離れて、観念的に構成されたものではない。およそ三三三百年前に漢字が成立した当時の宗教的な観念に基づいて、儀礼のあり方がそのまま文字の構成の上に反映されている。それでたとえば死葬の際の儀礼は、そのままその関係の文字の構造の上に反映されている。そのとき、死者の衣に対していろいろの儀礼が行われたことが、文字の構造によって知られるのである。」（「常用字解の編集について」より）

もう一つ、本書が従来の「漢和辞典」と異なったところがあります。

従来の漢和辞典は、その検索に、二つの方法が採られています。一つは、総画数を利用したもので、漢字を構成する画の数を数えて、その数の画数の文字の中から該当する文字を探すというものです。

もう一つは、部首による分類を利用した索引を使用するものです。「さんずい」があれば「さんずい」に

分類されている文字の中から、「にんべん」があれば「にんべん」に分類されている文字の中から、該当する文字を探すというものです。

このような方法しかなければ、音訳で漢字を解説する本を作るとは、ほぼ不可能と言わなければなりません。

ところがこの『常用字解』は、見出し字の並び順が、漢字を音読して、それを五十音順に並べた形になっております。従って音訳でも、五十音順に追って行けば、必ず目的の文字に行き着くことができるのです。音訳書として製作するには、打って付けの書物でした。

音訳版に着手する以前に、本会では、漢点字版を製作しました。この漢点字版の完成が、音訳版への着手の手がかりを与えてくれたものです。漢点字版製作に当たっても、その検索が最も心配なものでした。本会ではさらに遡って、活動の最初期に、『漢字源』（藤堂明保編・学習研究社）を、横浜国立大学の教授でおられた村田忠禧先生のご尽力によって、学習研究社様

からそのデータを頂戴して、製作しました。漢点字版・全九〇冊という、膨大なものになりました。

この『漢字源』を漢点字訳するに当たっては、どのように検索できるか検討しなければなりませんでしたが、見出し字の並び順が五十音順ではなかったからでした。

そこで考えたことは、見出し字の漢点字の符号をカナ読みして、さらにそれを点字の五十音順に並び替えるという、アクロバットのような方法でした。これを実現してくださったのが本会の木下さんで、見出し字を漢点字符号に直して、それを点字のカナ読みして、五十音順に並べるといいう作業を、プログラムを組んで行って下さいました。こうして『漢字源』は、漢点字の符号を頼りに検索することができるようになりました。

『常用字解』も、当初はそのようにしていただくかと考えておりましたが、もともとが音読の五十音順に並んでおりましたので、漢点字版でもそのまま十分検索に供されることが分かりました。従って検索については何の工夫もせずに済んだのでした。

このことが、『常用字解』の音訳版の製作という考えに結びついたのも、ほとんど必然と言えることだと思います。というのも、現在の視覚障害者の文字の環境は、まだまだ憂慮すべき状況から離れてはおりません。視覚障害者にとって文字と言えるのは、触知して読み取る方式の点字しかないと考えてよいと思われるのですが、そこには漢字を表す文字は、普及しておりません。しかも視覚障害者の多くが、中途失明者で占められるようになって来るのも、これもどうやら必然のよう、点字という文字を介在させずに、視覚障害者が漢字に親しむということが求められるという、矛盾に満ちた状況が訪れているらしいことを、肌で感じるようになって参りました。

このように考えを進めますと、自ずと『常用字解』は音訳に叶うか、という問いが設定されて、漢点字版の製作の経験を生かせれば、十分可能性はあるという答えが、私の中で導かれました。言い換えれば、私の立場からしますと、漢点字版さえあれば十分と言ってもよいはずですが、私がこの『常用字解』の漢点字版から受けた恩恵を、多くの視覚障害者にも受けて欲し

いと思いますと、漢点字版だけあれば十分という考えに留まっていることはできまい、と考えるようになってのでした。

恐らく音訳版の完成した現在も、多くの視覚障害者・音訳者・視覚障害者へのサービスをする施設の皆様は、半信半疑、しかも直ちになすべき検証と評価に、何時手を染めるのか、心許ないところがあります。検証し評価するということは、自らを検証し評価することでもありますので、私と致しましては大変楽しみなのですが、さてどのような反応が返って来ますか、関心を持つて見守りたいと思います。

元へ戻して、私の中では『常用字解』の音訳は十分可能性があるという考えに落ち着いたころ、当時墨田区立あずま図書館にお勤めであった山内薫さんにご相談致しましたが、一度ではご返事がいただけませんでした。何度かお願いしながら、漢点字版の製作から得たものを注ぎ込めば、十分可能であることを申し上げて、全国の音訳者の会合で、音訳者の方方にお声をかけていただくことになりました。それがあの東日本大震災の年・二〇一一年の六月でした。

それから十一年という歳月を経て、漸く完成を見ることができるようになりました。ご参集いただき、活動に携わって下さいました音訳者の皆様、ご支援下さいました羽化の会の皆様、また陰に陽にご支援下さいました墨田区立図書館の皆様、心より御礼を申し上げます。

音訳版のディスクには、「音訳版凡例」・「基本的な字形の説明一覧」・「呼び名一覧」・「あとがき」・「岡田メモについて」の文字資料が治められております。これらをご笑覧いただければ、この十一年の、私どもの苦闘をご想像いただけるものと存じます。

なおあとがきにあります「岡田メモ」とは、JISコード第一・二水準にあります文字に、一文字一文字の文字説明を付したもので、当初は私のメモとして音訳者の皆様にご提供したのですが、現在も名称はそのままに、改良を続けております。

岡田メモの作成に至りましたのには、この活動を通して、音訳の現況を知ることとなったことがあります。以前より音訳書を聴読していて、疑問に思ってい

たことがありました。それは何かと申せば、何時からかは定かではありませんが、音訳書に、漢字の説明が入るようになりました。それは大変結構なのですが、残念ながらその説明がまちまちで、しかもあまり適切とは言えないと感じられるものがほとんどだったので。その説明がまちまちであって、適切でないものだということは、現在も変わってはおりませんが、その理由が分かりませんでした。

『常用字解』を音訳するに当たって、最初にぶつかったのがこの点で、音訳者の皆様や読者の中から、この点をどうするかという疑問が提出されました。そこで分かったことですが、全国の音訳者の皆様が使用しておられる音訳マニュアルに、この漢字の説明について、ほんの僅かですが、触れられておりました。そこには、ごく短い語で、「適宜」かつ「適切」な説明を施すこととなっていて、どうやらその目安は示されていないというものでした。その先は音訳者の皆様に丸投げのようで、それを知れば、説明がまちまちであることも、適切さを欠いていることも、腑に落ちてしまったのでした。

しかしながら『常用字解』の音訳に当たっては、そのようなことではうまく行くまいことは既に明らかですので、私がメモを作るようになったのが経緯です。私も当初は、できるだけ短い説明で文字の説明ができればいいが、と考えて、そのように心がけて作り始めました。「極力短く適切な説明」というところに長い間気を取られてそのような説明をしようとしておりました。ところが不意に、この「極力短く」と「適切な」という語は、どうも相矛盾しているのではないかと考えるようになりました。しかも、「短い」か「適切」かの判断は、その説明を施した音訳者の方だけですので、言わばフリー・パスの状態なのということに、遅まきながら気が付いたのでした。

一つ例を挙げますと、「心裏」という熟語があります。「シンリ」と読みますが、「シンリ」という読みの熟語は無数にあります。大事な熟語ですので、文字の説明が必要と考えるのは誠に適切なのですが、どうやら説明を短いものにするところに気を取られてか、音訳者の方は、「シンリは、こころのうら」とだけおっしゃって、そのまま先へ進められました。「シン」

はこころ（心）、分かりました。「リ」はうら（裏）、これも分かりました。となれば誠によいのですが、「心裏」とは、果たして「こころのうら」なんでしょうか？

「所」という文字と「処」という文字があります。この二文字はどちらも音を「シヨ」、訓を「ところ」と読みます。歴史的にはほとんど同じ意味の文字として、同じような使われ方をしておりました。

ところが現在では、意味はともかく、使用法が際だって分けられております。そこで「所」を「バシヨのシヨ」、「処」を「シヨブンのシヨ」という説明がなされることが多いようです。これは「シンリ」とは違って間違いとは言えません。しかし何かが足りない、大事なものが落ちている、私にはそう思われました。漢字には意味と読みと形があります。形はともかく、意味と読みをもう少し説明してはもらえないものか、そう思われたのです。

そこで岡田メモでは、「極力短く」は、採らないことになりました。岡田メモでは、説明の要素として、その文字の「訓読」・「意味」・「熟語」と「音読」を

並べる形を基本として、多少バリエーションを持たせることにしました。『常用字解』には間に合わなかった感は否めませんが、こんなこともできるといふところはご覧に入れられたのではないかと思っております。

ここに「音訳版凡例」と「あとがき」を載録致します。お目をお通しいただければ幸いです。

音訳と編集に当たって下さいました平井任子様・石田眞佐子様・田村洋子様・岸上和子様・藤田教子様、そして皆様の後ろで支えて下さいました音訳者の皆様、誠にありがとうございました。

音訳版『常用字解』が、視覚障害者の皆様の文字の文化の向上に寄与できることを祈って止みません。

常用字解、音訳版凡例・文字資料

音訳版凡例

本音訳は『常用字解』漢点字版を参考にし、見出し字ごとに次の順序で音訳した。

見出し字、漢点字符号、画数、音読・訓読、字形（旧字形のあるものはその画数と字形）、解説、用例。

尚、個々の漢字は「岡田メモ」で説明した。

古い文字の資料として掲げられている甲骨文、金文、篆文などの字形の説明は省略した。また、図についてはタイトルのあるものはそのタイトル、図には簡単な説明を加えた。

『常用字解』漢点字版

製作者 「横浜漢点字羽化の会」

製作年 2009年・2010年3月

「岡田メモ」

「岡田メモ」は、『常用字解』の音訳に当たって使用した「個々の漢字を識別するためのツール」である。尚、「岡田メモ」は本音訳において始めて使用されたものである。

（巻末の「あとがき」 「岡田メモについて」 参

照。）

見出し字、また、「解説」文中で説明が必要と思われる漢字については「岡田メモ」で説明した。

各項目について

◆見出し字について

音読と「岡田メモ」を読み入れた。

◆漢点字符号について

本音訳は『常用字解』漢点字版を参考に行い、漢点字符号を表示した。漢点字の符号の説明は、1マスに8点を使う漢点字の上の点（始点と終点）を除いた下の6つの点を、カナ点字読みしたカナ読み、または点字符号を1の点から6の点までの番号で読んだ。

◆画数について

見出し字通字形の画数を読み上げた。

◆音読・訓読について

音読は括弧内に記された旧仮名は「旧仮名」と読み、細字で書かれた仮名は「細字」と読み入れ、それぞれを読み上げた。

◆字形について

字形は漢字の構成に従って、その配置を上から下へ・左から右へと説明。また構成要素を部首名と「岡田メモ」・〈呼び名〉を使用して説明した。括弧内の旧字形は、旧字形と読み、ここで画数を読み上げ、字形を説明した。

尚、部首及び常用漢字以外で多く使われた一部の漢字について、その字形を「基本的な字形の説明一覧」として巻末に掲げた。

〈呼び名〉とは、パソコンでは表示できない文字で、「岡田メモ」では対応できない文字。現代では文字として使用されていない形だが、かつては文字であり、意味もはっきりわかるものについて「解説」から抽出した言葉で説明したものでその名称としたものをいう。

〈呼び名〉は、それぞれ〈呼び名〉・字形・「使用見出し字」・そのページとディスク番号の順にまとめ、「〈呼び名〉一覧」として、巻末に掲げた。

「使用見出し字」とは、〈呼び名〉が見出し字、

あるいは「解説」において使われた場合の見出し字を言う。

◆解説について

「解説」と読み上げたあとに当該見出し字を読み入れた。

「解説」文中、説明が必要な漢字については「岡田メモ」、および〈呼び名〉で説明した。

「解説」において多く使用されている【さい】については、「解説」の終わりに「【さい】については凡例参照」とした。原本の「凡例」を参照された。

「解説」において、字形の説明等が長く、本文の流れを阻害すると思われる場合、「音訳者注」として「解説」の終わりに挿入した。

「解説」文中の括弧類の読み方について、小括弧は単に「括弧・括弧とじ」と読み上げ、鉤括弧については「鉤括弧・鉤括弧とじ」と読み上げた。文献に付された大括弧の符号名は省略した。

◆ 用例について

「用例」と読み上げたあとに当該見出し字を読み入れた。

「用例」に掲げられた語彙の、見出し字以外の漢字は「岡田メモ」で説明した。

◆ 終わりの言葉について

一見出し字の最後に、当該見出し字の「岡田メモ」を再度読み入れ、終わり、とした。

◆ 「音訓索引」について

原本巻末の「音訓索引」については、見出し字の訓読のみを抽出し「見出し字訓読索引」として、巻末に掲げた。

◆ 「文字資料」について

『常用字解』音訳の為に製作した次の五つの文字資料を巻末に収録した。

常用字解、音訳版凡例

常用字解、基本的な字形の説明一覧

常用字解、呼び名一覧

あとがき岡田メモについて

音訳版凡例終わり



|| || || || || || || ||

常用字解、あとがき・岡田メモに

ついて・文字資料

『常用字解』（初版）は見出し文字総数2744文字を収めた漢字の字典である。音訳では、一つ一つの漢字をどのように音声で表すかが大きな課題であった。同じ文字が随所に現れる場合は、その文字は常に同じ説明が求められた。この一つ一つの漢字の統一的な説明が「岡田メモ」である。

「岡田メモ」の製作は、この本の十年に及ぶ音訳作業と平行して進められた。この間に幾たびか更新を余

儀なくされた。このことは、「岡田メモ」の製作者とそれに基づいて音訳した音訳者にとって、最も大きな難関であり、そのために完全な統一をもって完遂できなかった。

音訳に当たって、「解説」では、挿入した漢字の説明が本文の流れを阻害しないような、音訳の仕方を追求した。また、字典としての「用例」・「索引」等、その使い方もできる限り考慮した。

「岡田メモ」は今まで、なければいけないものがなかったために作られた、のであり、今後、漢字を説明するための共通のツールとして、音訳の現場で利用されることが望まれる。

尚、最新の「岡田メモ」は「漢点字羽化の会」のホームページで閲覧並びにダウンロードできる。

「漢点字羽化の会」

URL: <http://www.ukanokai-web.jp/>

あとがき「岡田メモについて」終わり

点字から識字までの距離(一一七)

通所支援事業所へのサーブス(七)

山内 薫

キッズサポートりまでの音楽を

中心としたお話し会

前回ご紹介したほわわ墨田でもそうだったが、障害児施設でのお話し会や図書館や児童館で実施している乳幼児対象のお話し会では、歌や音楽が大きな力を持っていることを日々実感している。児童館の小さい子どもたちのためのお話し会には生後六ヶ月や九ヶ月という赤ちゃんが何人も参加してくれるが、絵本を読んでいる言葉に少しでもリズムや抑揚を付けると読み手の方にさっと顔を向ける。また絵本のせりふを歌にした、歌の入ったパネルシアターなどをやると、抱っこしているおかあさんもリズムに合わせて身体を揺さぶり、赤ちゃんを揺り動かすので、身体全体でお話しを楽しむことになる。

二〇一九年の夏休み、七月三一日のお話し会は、り

まの要望で音楽を中心としたプログラムでお話し会を実施した。参加してくれたのはりまの児童発達支援事業にきている幼児一名、放課後等デイサービスにきている小学生五名、中学生二名の計八人、幼児のお母さんも参加して下さった。図書館側は私とひきふね図書館の職員二名の他に隣の台東区のお話しグループ「おはなしはらっぱ」のKさんが飛び入り参加して下さいました。「おはなしはらっぱ」は台東区で活動するグループで台東区のホームページには、次のようなグループPRが載っている。「絵本手遊び等を楽しく学びながら、おはなし会を届けています。赤ちゃんからお年寄りまで地域の沢山の人にお話の世界を楽しんでもらいながら、それがみんなの心の栄養になれば嬉しいです。」

「おはなしはらっぱ」は、台東区鳥越の助産院で毎月赤ちゃん向けのお話し会を行っている。「とりこえ助産院 赤ちゃんのひろば」一ヶ月からの赤ちゃんが集まれる広場です」というネット上のチラシに「とりこえサロン mini」おはなしはらっぱ“さんの手あそび・わらべうたや絵本の読み聞かせなど遊びなが

ら広場で過ごせます。助産師もいます。対象・興味ある方などなたでも、定員…一五人程度、料金…大人一人五〇〇円 公益社団法人 日本助産師会」とある。

Kさんは元々市立の保育園に長年勤めていたという。

さて音楽を中心としたプログラムの始めは、ペープサートの歌「どんないろがすき」（坂田おさむ作曲）。りまの部屋

には舞台がないので、折りたたみ式の長テーブルを収納する時のようにテーブル面を立てて、その後ろに演者が隠れて歌に合わせてペープザートを行った。Kさんには前奏の部分と間奏の部分をキ



写真1 どんないろがすきのペープサート

ーボードで弾いてもらった。

次に私が替え歌の絵本『ねばらねばなっとう』（林
木林著、たかお ゆうこ絵、わくわくユーモアえほ
ん、ひかりのくにを紙芝居化したもの）を歌いながら
行った。「静かな湖畔」の「カッコー カッコー カ
ッコカッコカッコー」の部分で「ナットー ナットー
ナットー ナットー」と歌うのだが、その部分の
「♪ソミー ソミー ソミソミソミー」のところだけ
二本のリコーダー
で伴奏してもらっ
た。

次は三浦太郎の
絵本『でんしゃが
きました』（童心
社）を読んだ。

「でんしゃはガッ
タン ふみきりカ
ンカン

でんしゃはゴッ



写真2 でんしゃがきましたの食堂車

トンふみきりカンカン

あれあれ なんだか いいにおい

ねずみさんの まってる さんかくえきに

ちいさい チーズの でんしゃがきました

しゅっぱつしんこう！

チン チン

と、いろいろな動物が待っている駅にいろいろなでん
しゃが来る。

「うさぎさんの まってる サラダえきに やさいた
つぷりでんしゃ」が

「ライオンさんの まってる ジュージューえきに
おにくの きかんしゃ」が

「ぞうさんの まってる パフェえきに フルーツパ
フェの かもつれっしや」が

「くまさんの まってる バターえきに やきたてパ
ンの でんしゃ」が

「かっぱさんの まってる さびぬきえきに とくじ
よう おすしでんしゃ」が

「わたしの まってる ごはんえきに れんけつした

おとうさんと おかあさんのしよくどうしや」が
そして、奥付ページには絵だけで「べつばらえき」
が描かれ、次の後ろの見返しにはケーキの列車が描か
れている。

この絵本の各ページで繰り返される初めの部分

「でんしやはガツタン ふみきりカンカン
でんしやはゴツトン ふみきりカンカン

あれあれ なんだか いいにおい」

というところにだけ曲を付けて歌うようにした。

三浦太郎の絵本はどの本も単純な構成で、しかもく
り返しが多いので、絵本の台詞そのものに曲を付けや
すい。すでに『バスがきました』『でんしやがきまし
た』『おうちへかえろ』『ポケット』『ぼうしかぶつ
て』『おふろにはいる』『あさだおはよう』（以上
童心社）『りんごが コロコロ コロリンコ』（講談
社）『なーらんだ』（こぐま社）等に曲を付けて読ん
でいる。

次にKさんがクマのぬいぐるみ人形を使って「くま
さんおでかけ」というお話しをした。お話しが終わっ
たあとでクマの人形が一人ひとりの前まで行って挨拶

したのだった。多くの子どもがクマとタッチや握手を
してくれた。

次に、ひきふね図書館の職員二人が行事用大型絵本
の『ありとすいか』（たむら しげる作・絵 ポプラ
社）を読んだ。

次は再びKさんの人形を使った「大きいワニさん小
さいワニさん」。

そして図書館職員のしかけ絵本『おおきなおおきな
きいろいひまわり』（フランセス

・バリー作・絵

たに ゆき訳 大日
本絵画）。ページ

をめくっていく
と、絵本が大きな

ひまわりになるし
かけ絵本で、子ど

もたちも大きなひ
まわりになったと

ころで喜んでい



写真3 くまさんと挨拶

た。

最後は三度登場のKさんがハンドル型のタンバリンを使ってリズム遊び「ドライブタンバリン」を歌いながら演じてくれた。

その後、子どもたちにも小さな鈴（リングベル）をわたして「しあわせならてをたたこう」を歌いながら、手をたたくところで鈴を鳴らしてもらって楽しんだ。

お話し会のあとはいつものように持って行った絵本をそれぞれ見てもらった。

参加してくれた子どもの中に一月にほわ墨田を尋ねたときに参加してくれた医療ケアの必要な重度の障害児があり、今年一年生になったことが分かった。

今回も出し物の中に歌や音楽が入るととても良く聞いてくれることを確認した。またKさんが行ったぬいぐるみや人形によるお話しもとても効果があることが分かった。今後の施設でのお話し会の構成の中で生かしていきたいと思う。

ところで、今回のりま訪問のあと、二〇二〇年にはいると、全国的な新型コロナウイルス感染拡大のため

に、高齢者施設をはじめとする様々な施設に向いてのお話し会が全くできなくなってしまった。放課後等デイサービスなどに対してはリモートでお話し会の映像を届けることなども試みられたようだが、やはり直接対面で行うお話し会とは違って子どもたちの反応も分らないなど、お話し楽しさをどこまで届けることができたか疑問である。今現在も施設に向くことは困難な状況が続いている。一日も早くコロナが終息して以前のようにながらかに施設でのお話し会が実施できるように祈念している。



写真4 絵本を見る

わたくしごと

回向院散策？

木村 多恵子



「ペンポーン」。〈こんにちは〉の呼びかけチャイムが鳴った。私はいそいそと玄関ドアを開ける。〈こんにちはー、おまちどうさま、二人でお迎えに来ました。もう車も待っていますよ。〉と墨田区の図書館の方は言った。

いよいよ梅雨に入ろうかと思われる6月初旬のある午後まだ肌寒い日、私は期待いっぱい9階からエレベーターで下りた。車を運転してくださる方も墨田区の図書館員の方だという。まあ私はなんて贅沢なお付き添いをうけるのだろう。

私たちは同じ墨田区内にある回向院へ行くのだ。このお出かけの話を最初にしてくださった方が〈木村さん、今度のお出かけはリッチですよ。なにしろ車付きですからね！〉と言われた。私はタクシーで行けばいいわ！と考えていただけにびっくりした。〈え？そうですか？では道案内もしなくていいのですね？〉〈そう、何も心配いりません〉と請け合ってくださいました。私がおおよそ知っている回向院は私が住む八広からは蔵前通りを越し京葉道路沿いの墨田区の端にある。したがっておおよそ墨田区の端から端へ行くようなものだ。〈こうやって車に乗せていただくと墨田区は狭いようでもやっぱり広いですね。いい道を選んでくださるので快適なスピードでしかもノンストップでこんなに走れるなんて初めての経験です〉と子供のように私は喜んでいた。

2、30分は走り続けたと思われる頃〈あつ、木村さんもうじき着きますよ〉と女性は言った。〈敷地内に入りました〉とさらに教えてくださった。ノンストップでここまで来るとは思わなかった。敷地内に入ってもさらにしばらく走り続ける。〈あつ事務所に寄るようですよ〉と説明してくださいました。〈事務所には私が行きますから皆さんはここでお待ちください。車から降りてもそのまま乗っけても構いません〉と男性ドライバーは言った。当然のように私は早く回向院の

空気を吸いたくて地面に降り立った。空気は澄んでいたが山へ登った時の空気とは違い昔の私の子供の頃のような静けさとごく自然な、やっぱりこれが透き通った空気、特殊な味もないシンプルな空気だった。けれども決して無味乾燥なものではなかった。

事務所にも話は通っていたのか手続きをしてくださった運転者さんは2、3分で車に戻っていらした。そうしてさらに7、8分、車は走った。〈あーこれですね?〉と二人の女性は納得したようだ。〈どんなところを走っているのですか?〉と私が聞くと〈道のはじの方には木立がたくさん並んでいて全体は舗装されています。車は奥へ奥へ入っています。回向院って広いのですねー。お坊さんたちもかなりたくさんいて、今食事が終わったところでそれぞれの房に入っているようです〉とちよつと自信げな説明が面白い。

いよいよ今日の本物の目的のところまで降りた。さっさちよつと下車した時にも感じたのだが車や電車の騒音もない。

〈さあ触ってごらんさい〉と学芸員に導かれて触

ったのは、石でできた深めの箱、縦20cm、横24、5cm?の横長の箱のようなものに漢字が浮き彫りされていた。かなり大きな一文字なのに私が分かったのは〈にんべんかな?〉と思われるものだった。〈右側は、横3本、そこに上から2本真つすぐ下りていて・
・あれ?四角くなっていると場所もある。ううん左から右へのびていてそのはじが上にはねている〉(今考えてもばかな触り方をしたものだ)なぜって最初私はこれが削り取ったものの文字とは知らなかったのである。私はここで玄武岩などを見せて触らせてもらうのだと思っていた。この情報のずれはとんでもない錯覚を起こさせていた。

学芸員さんや千葉大の学生さんは我慢強く付き合ってくれた。さつた。

どうもこの最初の文字は〈佛〉らしい。お坊さんたちは難しい〈佛〉を使うという。

〈こちらは?〉と見せてくれたのは〈仏〉で現在一般に使っている。

〈これは?〉と言われた文字は〈主〉だった。旧字はないと言われた。彫り方にむらがあったり、石の平

たいところも削る機械がうっかり当たってしまっても
つと上にはねたりするのが難しそうだった。

セメントや砂を固めたものから文字を浮き立たせる
道具で削ったのだという。この機械の名前も聞いてそ
の時は覚えたはずなのに家に着いたらとんと忘れた。

つまり〈佛〉と〈仏〉はそれに〈主〉の彫りだした
漢字を触らせていただいたのだ。石で（セメント？）
でも表した文字には木を削ったり割ったりして板に貼
り付けてくださったものもあった。こちらの方が私に
はちよつとは分かっただろうか？

この企画は墨田区と墨田区の図書館の企画で、実働
作業は千葉大の学生さんだという。

学生さんたちは鑿（のみ）を使ったことがないし知
らないと言っていた。墨田区のボランティアの方々も
関わっていたようだ。

私が感動したのは仏教の〈佛〉〈仏〉それにキリス
ト教の〈主〉を取り上げられたことである。

この重大なコロナ禍にあって、さらに恐怖の独裁政

治による一方的な他国への軍事侵攻などすべてなくし
てほしいと願う。

この体験から帰ってきて早速図書館の方がこの3文
字をレーザーライターで書いてくださったので〈仏〉の
やさしい文字と〈主〉を一生懸命なぞり読みしてい
る。世界が平和であれかしと祈りながら・・・。

最後に毛並みのよいおっとりした猫が顔を出してく
れた。〈回向院のうめちゃんです〉と書いた札を首に
かけているという。私が背中を撫でているとしばらく
おっとりとしよとしていてから 〈もういいでしょ
ー？〉と言うようにゆったりと鷹揚に私の手から逃れ
ていった。

もう一つおまけがあった。予定のお約束の時間がく
ると運転者さんが私たちを乗せる車をとりいらして
いるのを待っていたらほんの少し雨が降り出した。傘
を必要ともしない程度のひそやかな雨だった。

2022年7月7日

汗拭い見上げる立葵



江戸文人の漢詩

途上とじょう

頼山陽らいさんよう

寒蟻唧唧として 鳴蛙に雑る

(かんしようしよくしよくしよくとして めいあにまじる)

村駅の秋風 馬影斜めなり

(そんえきのしゅうふう ばえいななめなり)

節は重陽を過ぎて 菊 未だ発かず

(せつはちようようをすぎて きく いまだひらかず)

卻つて見る 瓜架に黄花を著くるを

(かえつてみる かかにこうかをつくるを)

道すがら

しきりに鳴くひぐらしの声が蛙の声に

まざつて聞こえる。

村の宿場には秋の風が吹き、馬の影が

長くのびている。

重陽の節句が過ぎてても

まだ菊の花はひらかず、

かえつて瓜の棚に黄色の

瓜の花が咲いている。



漢詩の訓読と訳文は『漢文名作選「第2集」
5 日本の漢詩文』（大修館書店）による。

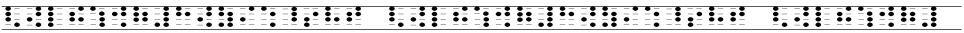
寒かん 蟻しやう 唧しよく 唧しよく 重ちよう 陽よう 山さん 陽よう 三さん 九く 歳さい、薩さつ 摩ま の田でん 舎しゃ を旅りょ した
 ときとき の作さく。力りき 強かち い勇ゆう 壯さう な詩し を得え 意い と
 する一いつ 方ほう、ここ のよよう うな写しやう 生せい 詩し にも
 すぐすぐ れれ てて いた。

寒かん 蟻しやう 唧しよく 唧しよく 重ちよう 陽よう 山さん 陽よう 三さん 九く 歳さい、薩さつ 摩ま の田でん 舎しゃ を旅りょ した
 ときとき の作さく。力りき 強かち い勇ゆう 壯さう な詩し を得え 意い と
 する一いつ 方ほう、ここ のよよう うな写しやう 生せい 詩し にも
 すぐすぐ れれ てて いた。

寒かん 蟻しやう 唧しよく 唧しよく 重ちよう 陽よう 山さん 陽よう 三さん 九く 歳さい、薩さつ 摩ま の田でん 舎しゃ を旅りょ した
 ときとき の作さく。力りき 強かち い勇ゆう 壯さう な詩し を得え 意い と
 する一いつ 方ほう、ここ のよよう うな写しやう 生せい 詩し にも
 すぐすぐ れれ てて いた。

却ツ 節テ 村ハ 寒 蟻 唧 寒
 看ル 過ギ 駅ノ 蟻 唧 蟻
 瓜 重 秋 風 唧 唧
 架ニ 陽ヲ 馬 雑ニ 鳴
 著ニ 菊ヲ 馬 影 蛙
 黄 未 斜メ 斜ナリ
 花ヲ 発カ 斜ナリ 斜ナリ

(山陽詩鈔)



途 上 頼 山 陽

寒 唧 唧 トシテ 雑 ル 鳴 蛙

二

村 駅 ノ 秋 風 馬 影 斜 メナリ

節 ハ 過 ギテ 重 陽 ヲ 菊 未

夕 発 力

卻 ツテ 看 ル 瓜 架 ニ 著 クルヲ 黄

花 ヲ

～ 將 虫 しょう つくつくほうし ひ ぐらし

蝻 () は、JIS第1・第2水準以外の漢字です。

頼 山 陽 (1780~1832年)

江戸時代後期の日本を代表する漢学者で、歴史・文学・書画など、さまざまな分野で活躍した。

父は儒学者で母も文人。安芸(広島)で育つ。早くから詩文に非凡な才能を表すが、21歳の時、脱藩事件を起こして廃嫡、あしかけ5年の間、自宅に幽閉の身となる。

32歳の春、京都に居をかまえて私塾を開く。『日本外史』の手直しや、その他の史書の著作・詩作に専念した。

『日本外史』源平争乱から徳川家康までの武士の歴史を記す。当時のベストラーになり、幕末から明治初期の人々に大きな影響を与えた。

『山陽詩鈔』死後刊行された詩集。「鞭声肅肅(べんせいしゆくしゆく)夜河を過(わた)る」で始まる、川中島の戦いの詩も収められている。

頼山陽肖像画



一 『常用字解』の音訳版が完成しました。

本誌にご報告致しましたように、『常用字解』（白川静著・平凡社）の音訳版が完成致しました。墨田区立ひきふね図書館から、サピエ図書館に登録していただくよう、手続きをしていただいております。間もなくそれも完了して、読者の許へお届けできるものと存じます。

東日本大震災の直後、二〇一一年にこのプロジェクトは開始されました。当初は沢山の音訳者の方にご参加をいただきましたが、残念ながら最後まで残って下さいました方は、多くはありませんでした。しかしながらそのメンバーの皆様の後ろには、この活動を支えて下さった方々が沢山おられました。このことによつて、このプロジェクトも、今日を迎えられたと申しても過言ではありません。

思い返せば、予想はできていたとは申せ、音訳としては、誰もが未経験であることに遭遇して参りました。例えば漢字の説明、また漢字の字形の説明などは、従来の音訳で行われている方式では、到底叶いませんでした。また、書物が大部でしたので、膨大な音訳となりました。そのために複数の音訳者の皆様に、分担して当たっていただきました。いきおい読み一つにしても、複数の方々に、統一した読みをお願いしなければならぬという、単独の音訳では思い至らない事態にも遭遇致しました。

しかしこのことは、音訳の今後には、様々な示唆を与えて下さったものと考えております。その一つを申せば、音訳の作業も、でき得れば共同作業にして、複数の方々が共通の認識を持ちながら、よりよくチェック機能を果たせるよう、組織だった活動を目指していただけだと考えるようになりました。その他にも思い当たるところはございますが、細部に渡るところは控

えさせていただきます。

視覚障害者の皆様に、漢字の知識をご提供できることは、今後を思えば、どのような未来に繋がるのか、大変楽しみに存じます。

音訳版の文字資料は、本会のホームページにも掲載致します。岡田メモも更新しつつ、掲載いたしますので、ご利用いただければ幸いです。

二 漢点字データが、サピエ図書館に

登録されました。

この四月から、KGS製の点字ディスプレイ・ブレイルメモ用のデータ・BMTファイルの形式で、漢点字の電子データが、サピエ図書館に、登録されることになりました。

早速本会の製作しております“be on Saturday”（朝日新聞、毎週土曜掲載）、「朝日歌壇・俳壇」（朝日新聞・毎週水曜掲載）、そして朝日

新聞と読売新聞の健康記事を、BMTファイルにして、登録していただくことに致しました。現在五月分まで登録が完了しております。六月分は、現在国立国会図書館を通して、手続きを行っております。サピエ図書館からダウンロードして、ご利用下さい。

三 『古事記』

今年度の中央図書館への納入書として、『古事記』（全訳注・次田真幸）を準備しております。

昨年度まで十年をかけて、『萬葉集釋注』（伊藤博著・集英社）を製作し、納入してまいりました。全十巻を完成して、「万葉集」の全容を見ることができるようになりました。

今年度は、もう一つの古典の大本である『古事記』に挑戦することに致しました。

ご期待下さい。

編集後記

▼新型コロナウイルスの第7波が猛烈な勢いで拡大していたとき、筆者自身がとうとうやられてしまいました▼本誌の最終的な編集にかかろうとする矢先、いつもと違う体調の変化を感じました。直前に相模原市の合唱連盟による合唱祭が行われ、それに参加したときに感染したのではないかと考えられますが、感染は移動中の電車内であったかも知れません▼体温の上昇はほんの微熱程度で、特徴は、喉の痛みと咳や痰でした。近所のクリニックでPCR検査を受けたら、妻と2人とも陽性。10日間は外出禁止ということ、おとなしく自宅療養としましたが、その後の回復もすつきりとは行きませんが、そんなことで本誌の発行を2週間遅らせましたが、コロナの流行状態に危険を感じて、さらに大幅に延期せざるを得ず、今に至りました。編集以外の作業は皆さんのご協力で、何とか発行作業を進めることができました▼本当に、ご心配をおかけし、申し訳ありません。ありがとうございました。

木下 和久

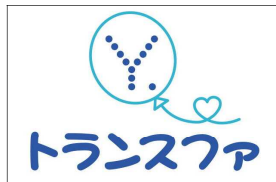
(有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。

研修者募集：弊社では、ガイドヘルパー（視覚障害者）の資格取得研修を実施致します。詳細はホームページで。



URL: www.ytrans.net

〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1105

電話: 045-263-0306

FAX: 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は2023年1月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。